

デカルト（René Descartes, 1596-1650）とメンタルヘルス

2025年8月9日（土） 於 FRAME in BOX

デカルトはスピノザよりも36歳上で、生涯の最後の18年間は重なっています。「デカルト」はフランス語の名前で、「デカルト的」をフランス語や英語で「カルテジアン」と言うのはラテン語名（Renatus Cartesius）によるものです。学術知識はラテン語で記すのが当たり前（スコラ学）という時代でしたが、デカルトはあえてフランス語で書きました。これは現代でいえばどんな感じでしょうか。グローバリズムでは何でも英語化すべきという風潮があります（東大は授業をすべて英語で行う新学部の設置を決めました）が、これは実は進歩ではなく、いってみれば中世スコラ学的世界への退行だと言えます。ラテン語支配の状況下でルターが聖書をドイツ語訳し、デカルトがフランス語で哲学したこと、母語で書き母語で考えることこそ「進歩」なのです。

デカルトと言えば「我思うゆえに我あり」というキャッチフレーズで有名です。「コギト エルゴ スム（Cogito ergo sum.）」というラテン語の文章を聞いたことがある人もいるかもしれません。デカルト自身はフランス語で書いた（Je pense, donc je suis.）のですが、別の人がそれをラテン語に翻訳したのがその後広まったということです。それくらいラテン語の権威が強かったということで、必要もないのに（そして本当は出来もしないのに）ラテン語を振り回す人もいました。それは現代の会社や学校で、必要もないのに（そして本当は出来もしないのに）カタカナ英語を振り回す人がいるのとまったく同じ。17世紀から何一つ進歩していないのがよく分かります。

さて「我思うゆえに我あり」とはいったい何を言おうとしているのか。哲学史の解説ではしばしば、デカルトが絶対確実な知識に到達するために全ての先入見を疑った（「方法的懐疑」）結果、そうして疑っている自分の存在だけは疑いえないという真理に到達した、などと説明されます。でも僕は高校の倫理の授業でそれを聞いたとき、そんな「疑っているこの自分の存在」なんてつまらんことが確実に分かってもそれが何の足しになるのかと思い、答案にそう書いたら、先生にふざけるなと怒られました。その時、あ、このことかと気づきました。つまり、デカルトの「コギト」の意味はこれこれ、と説明する学校（スコラ）的知識に対して、そんなもんが何になる？と疑う思考こそ「我思う....」の意味ではなかったのだろうか、と考えたのです。

学校（スコラ）的知識というのは、「昔のエライ人が言ったのだから憶えなさい」という形式をとります。デカルトにとって「昔のエライ人」というのはたとえばアリストテレスでした。でもこれはアリストテレス自身というよりは、ラテン語に翻訳され権威付けられたアリストテレスです。現代に置き換えてみると、私たちの学校ではデカルトが「昔のエライ人」に当たります。しかしもしもデカルトがそこにいたら、近代哲学の始祖としてのデカルトによる「心身二元論」とはこういう思想である、などという授業の説明こそ疑え！ということでしょう。ましてや「デカルト的二元論の克服」なんて課題を立てて、曖昧で古臭い形而上学が「現代思想の最先端」みたいに語られているの見たら、チャンチャラおかしいと思うでしょうね。

さて、デカルトは1649年に『情念論』という本を書きました。この「情念」とは「パッション」という概念です。パッションは「情熱」と訳したりもしますが、また能動に対する「受動」という意味もあります（さらにはイエス・キリストの「受難」もパッションです）。この概念が、心と身体との関係について考えるカギになります。デカルトは身体の状態こそが精神活動の条件だと

考えました。身体の能動的変化は、精神から見ると「受動（パッション）」になります。これが「情念」で、それは精神活動の障害ではなくてむしろ構成要素なのです。

心身の関係に関するデカルト思想は、医学や解剖学を背景としています。16世紀頃まで医学における最大の権威はガレノス（Γαληνός, 129? - 200?）でした。ガレノスはローマ時代に生きたギリシア人の医師で、ヒポクラテスの四体液（血液、粘液、黒胆汁、黄胆汁）を基礎にして人間の健康と病気について考えました。四体液説が近代医学と異なるのは、それが身体のメカニズムを説明するだけでなく、季節の運行や宇宙を構成する四元素（風、水、火、土）、また四つの基本性質（熱、冷、湿、乾）にも関係付けられた、全体論（holism）であるという点です。生命の働きを説明するために、ガレノスは「精気」という概念を用います。「精気」はギリシア語では「プネウマ」と言い、ラテン語では「スピリトゥス」と訳されます。これがフランス語の「エスプリ」で、英語では「スピリット」、ドイツ語の「ガイスト」に対応します。プネウマは風なので、ガレノスは身体内の「精気」は肺が取り込んだ空気から来ると考えましたが、デカルトはそれを体液が希薄化したガスのようなものとして理解していたようです。

人間の健康状態をこうした宇宙論・全体論における諸要素のバランスとしてとらえる昔の医学に対して、現代医学において健康とは数値的な指標、あるいは心身が果たす「機能」によって定義されます。病院で診察を受けた時、医師がこちらを振り向きもせずモニタ上の数値だけ見て「まあまあ健康ですよ」などと言うのを体験された方もいるでしょう。それでは、身体ではなく精神の健康についてはどうでしょうか。世界保健機関（WHO）によれば「メンタルヘルス」とは次のような状態のことだそうです。

Mental health is not just the absence of mental disorder. It is defined as a state of well-being in which every individual realizes his or her own potential, can cope with the normal stresses of life, can work productively and fruitfully, and is able to make a contribution to her or his community.

（精神的健康とは、単に精神障害でないということではない。それは、一人一人が彼または彼女自らの可能性を実現し、人生における普通のストレスに対処でき、生産的にまた実り多く働くことができ、彼または彼女の共同体に貢献することができるという、十全にある状態であると定義されている。）

「可能性の実現」「ストレスへの対処」「生産的な労働」「社会への貢献」とともに、ここにはしばしば「幸福」の新しい定義とされる「十全な状態（ウェルビーイング）」という概念も使われています。研究費を申請したりする時にこうした「メンタルヘルス」や「ウェルビーイング」といった横文字を入れると採択されやすいという現実もあり、これらの概念は広く知られるようになりました。英語化は国際大学ランキングの点数を上げる一番手っ取り早い対策なので、英語による講義や英語話者の教員を増やすのと同じ理屈です。しかし、日本の大学の評価をなぜ英語圏の評価機関に頼らなければいけないのかが根本的に疑問であるように、私たちの健康や幸福についてなぜ怪しげな国際機関に決めてもらわなければならないのかが、そもそも分かりません。

「大きなお世話」と言うべきではないでしょうか。

もしもデカルトがここにいたら、何と言うか。おそらく、健康や幸福の定義についてあれこれ議論する前に、そもそもあなたたちはなぜ外部の「権威」に頼るのか、どうして自分の頭で考えようとしなのかな？と私たちに問いかけることでしょう。